

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	山 口 県
-------	-------

学校の概要 (平成15年4月現在)

学校名	小 郡 町 立 小 郡 中 学 校					教員数
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	42
学級数	7	7	7	1	22	
生徒数	239	252	266	5	762	

研究の概要

1. 研究主題

「生きる力」を育む教育課程の実践 - 生徒の個性を育てる指導方法の工夫 -
--

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

<p>少人数授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1年英語 中学校に入学し、初めて本格的に英語の学習を行うので、少人数の指導でスムーズに英語に慣れるため。 ・ 2年理科 中学校理科の中でも生徒にとって理解の難しい電流や原子の単元があるので、個々の生徒の理解の程度を教師が把握し適切な指導を行うため。 ・ 3年数学 加配教員はないが、来年度以降の研究に取り組むための試行。 <p>選択教科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1年 週1時間(5教科、補充・発展)12コース ・ 2年 週1時間(5教科、補充・発展)13コース 週1時間(実技4教科、興味・関心)11コース ・ 3年 週3時間(5教科、補充・発展)13コース 週1時間(実技4教科、興味・関心)11コース <p>多様な個性をもった生徒にできるだけ少人数で指導するために可能な限りの時間とコースを設定する。また国語・社会・数学・理科・英語の5教科については、基礎・充実・発展の原則3コースとし、選択履修幅の拡大を行う。</p>

(2) 年次ごとの計画

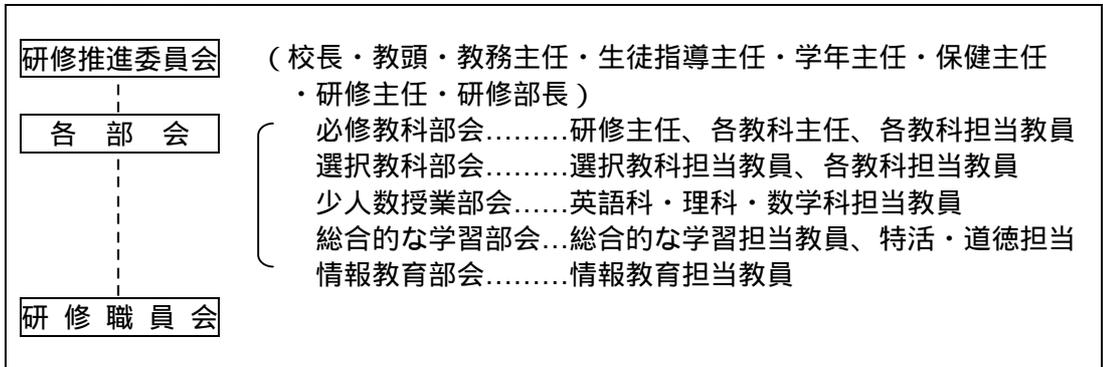
平成14年度	<p style="text-align: center;">テーマ</p> <p>「生きる力」を育む教育課程の実践(1年次) - 生徒の学ぶ意欲を育てる絶対評価のあり方 -</p> <p style="text-align: center;">研究の見通し(仮説)</p> <p>生徒は、学ぶことを保障され的確に評価されることで成長を実感する。自分の成長を実感したときに「さらに分かるようになりたい」「もっと成長したい」という方向へ一層強く変容していく。</p>
--------	--

	<p>研究の内容・方法</p> <p>絶対評価の導入に伴い、生徒の学習活動や成果についての評価の規準及び基準と方法についての研修を進め、それらをもとに教師の指導方法の改善について研究する。</p>
--	--

平成15年度	<p>テーマ</p> <p>「生きる力」を育む教育課程の実践（2年次） - 生徒の個性を育てる指導方法の工夫 -</p> <p>研究の見通し</p> <p>様々な個性に対応するカリキュラムづくりや生徒の個性に応じた指導法を工夫することによって、生徒の個性を伸ばし「生きる力」を育むことができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>習熟度別の少人数授業、選択教科のカリキュラムづくりや指導方法の工夫・改善を通して、生徒の個性をいかに育てるかを研究する。</p>
--------	---

平成16年度	<p>テーマ</p> <p>「生きる力」を育む教育課程の実践（3年次） - 生徒の学ぶ意欲を育てる教育活動 -</p> <p>研究の見通し</p> <p>教科外領域（総合的な学習・道徳・学級活動）を含めた教育課程全般を通して生徒の学ぶ意欲を育てることで、生徒自ら問題を解決しようとする力などの「生きる力」を育てることができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>評価とそれに伴う指導法を改善することにより、生徒が自ら学ぼうとする意欲を喚起させるような総合的な教育課程の編成のあり方を研究する。</p>
--------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

- (1) 5教科の選択教科で基礎・充実・発展の原則3コースに分けて実施し、そのコースに合った指導方法・指導体制の工夫改善を行う。
多彩なコース展開ができた。(3年では5教科週3回 13コースを実施し、生徒選択の範囲が広がった。)
担任が5月末にガイダンス(教育相談)を行い、数名がコースを変更。1学期末、2学期末に基礎 充実、充実 発展へのコース変更を図った。生徒選択で自分に適したコース選択ができ、理解が深まった。また苦手教科に対する学習意欲が高まった。
習熟度3コースに分かれているため、生徒の実態に即した細やかな指導ができた。
- (2) 少人数授業を1年英語、2年理科、3年数学で実施。英語は各クラスを機械的に2グループに編成、理科は各クラスを習熟度別(基礎コース、発展コース)に2グループに編成、数学は機械的に7クラスを10グループに編成し、その指導方法・指導体制の工夫改善を行う。
「生徒の学習状況を把握しやすい」「個別にアプローチする時間を確保できる」など少人数を生かした授業が実践できてきている。
研究授業や公開授業などを通して授業方法の工夫改善を図った。
理科では、習熟度を客観的に選択できる資料として、習熟度テストなどの度数分布図などを提示し、選択させた。発展コースでは、意欲も高く、学力に応じた指導ができる。基礎コースでは、発表の機会が増え、質問をする生徒が増えた。
年度途中でのコース分けの変更を年度当初・学期末に行い、習熟度に応じた学習集団編成を行った。
定期テストの度数分布を見ると、全体的には、分布状況が高得点側に移動した。特に発展コースの分布の山が高得点側に移動した。(図1参照)
- (3) 定期テスト前の質問教室や長期休業中の補充学習を実施する。
質問教室を定期テスト前の放課後数日間、各学年で実施し、多数の参加者があった。
夏休みに数日間、補充学習を実施し、多数の参加者があった。(1年のべ242人、2年のべ252人、3年のべ137人)

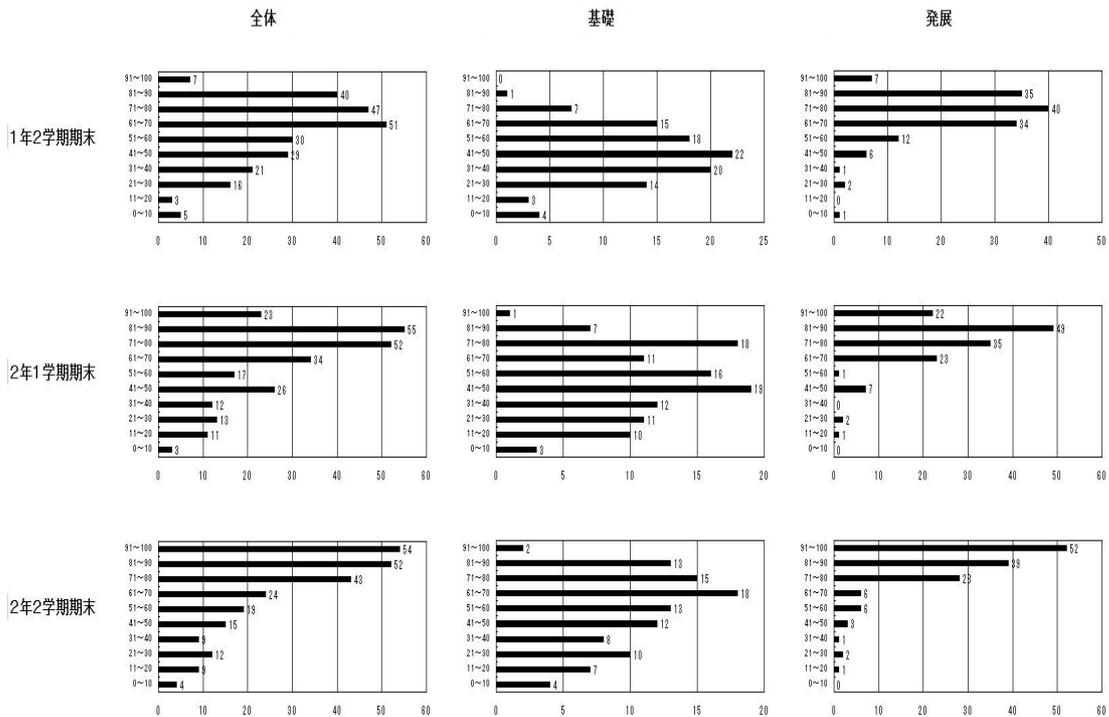
2. 今後の課題

- (1) コース別の指導方法・指導体制のさらなる工夫。クラス枠を取り除いた学習集団の授業規律、グループづくり、組織づくりなどの指導体制の工夫。
適切なコース選択のさらなる工夫。生徒の選択能力の育成。
評価方法のさらなる工夫。習熟度別コースでの評価を行うときの方法や時期、手段などの再検討。
- (2) 理科では、特に習熟度別グループ編成の基礎コースにおいて、学習意欲、学力ともに満足でない生徒への支援方法や、生徒同士の教え合い学習への取組が課題である。また進度の差や内容の差が出ること、教室の割振りが課題である。
学習内容に応じた指導体制(一斉、TT、少人数)の変更の検討。
3年間を見通した1年間しかない少人数授業の位置付け。

(3) 放課後の行事等のため、質問教室の時間の確保が不十分。
成果が見えにくい。

(図1)

理科定期テストの得点分布の変化



学力把握のための学校としての取組

- * 調査の目的.....意識調査
- 実施内容.....全校生徒 アンケート形式
- 時期.....10月、2月(予定)

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- * 研究授業(要請訪問) 9月24日 小郡中 町内公開 公開授業へ向けての研修
(1年選択国語3コース・1年選択数学3コース・2年少人数授業理科2コース)
- * 公開授業 11月27日 小郡中
(1年選択国語3コース・1年選択数学3コース・2年少人数授業理科2コース
・3年選択英語3コース、全体会・研究協議)
- * 研究のまとめ冊子作成
- * 研究のまとめをHP作成予定
- * 他県からの公開授業への研修参加。他県からの学校視察あり。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 ✓ 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 ✓ 16学級以上
- 【指導体制】 ✓ 少人数指導 T・Tによる指導
 ✓ その他
- 【研究教科】 ✓ 国語 社会 ✓ 数学 ✓ 理科 ✓ 外国語
 音楽 美術 技術・家庭 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 ✓ 有 無